

奇術師幻治郎

第一話 「黒いリボンの女」

鐸木能光

田沢湖湖畔に建つ観光ホテルはひとけもなく、寂れていた。施設のテニスコートはあちこちひび割れて、そこから剃り残しの髭のように雑草が生えている。

夕陽は沈みきり、秒刻みで景色が黒ずんでいく。

しかし、運転する球湖たまこは、車を停める素振りも見せず、その寂れたホテルの横を通過した。

「ここじゃあないわけ？」

俺は運転席の球湖に訊いた。

「こんな中途半端な宿を、私が予約すると思えます？」

球湖はまっすぐ前を見ながら答えた。

「俺は別にどこでもいいよ。早く一風呂浴びて、落ち着きたいだけさ」

「ダメダメ、そんな疲れたおじさんみたいなこと言ってちゃ。どうせなら最高の一風呂を探し求めなくちゃ」

「これから行くところでは最高の風呂に入れるわけ？」

「ええ。さすがは球湖たまだと誉めてもらえるかと確信していますわ」
そう言う球湖の横顔が、嬉しそうに微笑んだ。

俺は黙ってシートに深くもたれ込んだ。

秋田駅で借りたレンタカーは、ディーゼルの四輪駆動車だった。まだ雪のシーズンには早いし、なんでこんなごついクルマを借り

なければならぬのか、そのときも手配をした球湖に一言文句を言いたかったが、結局黙っていた。

今回の旅行は、どうも最初から気がのらない。

球湖と仕事抜きで旅をするのはこれが初めてのことだ。なんと、今月は月末まで仕事がない。スケジュール帳は真っ白だ。いつからこんなことになってしまったのか……。

俺は目を閉じて、ここ一年ほどで急速に落ちぶれていた自分の転落の構図を思い出していた。

今から思えば、四十路にさしかかろうとする五年くらい前が、俺の人生における運気がピークにあった時期だっただろうか。

サイキック・イリュージョニスト^{げんじろう}幻治郎。日本中で俺の名を知らぬ者はほとんどいなかった。

かつてこの国で、マジシャンがあればどこメディアの寵児となつたことがあっただろうか？ 折からのオカルトブームに乗って、マジックと超能力を結びつけた演出が一大ブームを巻き起こしたのだ。

手のひらをコインやグラスの上にかざして「気が流れる、流れる……よし、入った！」と言う独特のスタイルはたちまち流行になり、俺のものまねをするコメディアンまで現れた。

「あんなもの、超能力でも何でもない。ただの手品だ」と、ムキになって騒ぎ出す三流マジシャンやタレント学者もいた。

もちろん俺は相手にしなかった。

「私は自分のショーを、超能力だともマジックだとも言っていません。判断するのは見ているあなたなのです」
いつもそう言って逃げた。

俺の人気を支えてきたのは、高度な技術と、それを可能にした絶え間ない努力、そして少しばかりの知恵なのだ。

マジック界ではすでに常識として知られているアイデアや技術も、ちよつとした発想の転換や創意工夫で、まったく新しいものとして映る場合がある。

例えば、鉄のスプーンを曲げる手品は素人でもやっている。しかし、木のスプーンを曲げることは素人にはできない。これをやると客は相当なショックを受ける。

もちろん、木のスプーンを曲げることなどできるはずはない。最初から曲がった別のスプーンを用意しておき、それとすりかえるのだ。

素人のインチキ超能力者がやってみせるスプーン曲げは一種の「力技」で、指先に一瞬強い力を加える。一方、すり変えるのは純粹にマジックの技であり、技術がものをいう。

客の視線を巧みに逸らして、計算し尽くされた動きの流れの中で曲げているかのように見せているときには、すでにスプーンは曲がったものにすり替えられている。

こうした「技術」に関しては、俺はすでに世界でも一流の域に到達していると自負している。

しかし、爆発的な「幻治郎ブーム」は一年で終わった。

娯楽番組ではいちばん勢いのあったテレビ局のプロデューサーと決裂したのも、ブーム終焉を早めた。

唐津というそのプロデューサーは、俺にカメラトリックを使つた大がかりなショーをやるように言ってきた。

当時、アメリカではカパードというマジシャンが、自由の女神を消したり、万里の長城をくぐり抜けたりするテレビショーで人気を得ていたが、ああしたとてつもないスケールの番組を作りたいと言ってきたのだ。

東京タワーを消す、富士山の雪を一瞬にして溶かす、疾走する

クルマでビルを突き抜ける……。

もちろんそうした「ショー」は、カメラトリックなしには成立しない。逆に言えば、「これは無編集です。カメラトリックは一切使っていません」という大見得を切ることが大前提になる。そう自信たっぷりに言い切れる演技が、マジシャンとしての技術よりも大切になる。

俺は断った。

唐津は執拗に食い下がってきた。

たまたまひどく疲れていたとき、俺はとうとう爆発してやつを怒鳴りつけた。

「俺の技を、インチキ霊媒師や、タレント・司会者丸抱えの催眠術ショーと一緒にするのか？」と。

それがきっかけで、俺は次第にテレビからは疎遠になった。原因はそれだけではなかったが、今はもう思い返したくもない。

所詮、カメラトリックや仕込みの客が使えるテレビというメディアに、純粋なマジックは馴染まないのかもしれない。

俺は再び旅芸人的な仕事に戻っていった。

助手も次々に解雇し、残ったのは球湖だけになった。

球湖は舞台でも魅力的で優秀な助手だが、スケジュール調整やマネージメントなどの裏方仕事もきちんとかなしてくれる。童顔で、ちよつと見には高校生くらいにしか見えないが、実はもうすぐ二十八になる。

「すっかり暗くなっちゃったわね」

球湖が運転する四駆のレンタカーは、いつしか山道を登っていた。両側に迫る深い林のせいで、周囲はもはや真っ暗と言っているほどだった。ヘッドライトに照らされる道も、狭く、曲がりくねり、ひどく心許ない。

「本当に大丈夫なのか？ この道で……」

「ええ、途中まではこの道しかないはずよ。未舗装の脇道に入るところがあるらしいけれど……」

前方を黒いものがすっと滑空して横切った。鳥ではない。ムササビだろう。

「いやあー、素晴らしいねえ。これぞ日本の自然だ。深い森に抱かれて露天風呂を楽しめるのかあ」

俺は嫌みのつもりでそう言ったのだが、球湖には通じなかったのか、相変わらず微笑を絶やさず、楽しそうに運転している。

どれだけ走っただろう。本当にこの先に温泉宿などあるのだろうかと疑い始めたとき、ヘッドライトの先に小さな看板が浮かび上がった。

「亀の湯入り口」

その看板がなければ絶対に踏み入れないだろうと思うような細い未舗装路が分岐している。

さすがの球湖も、ステアリングを切るとき、本当にこの道でいいのかと確かめるように、もう一度看板を見た。

ようやく四輪駆動車の真価が発揮された。それほどひどい道だった。

せっかく登ってきた道を、今度はなだらかに下っていく。かと思ふとゆっくり回り込み、また登る。

暫く走ると、急に広い場所に出た。そこが宿の駐車場だった。

車は四、五台しか停まっていない。何台かは宿の車だから、客はほとんどいないことになる。

いちばん奥の乗用車のルームランプが点っていた。

点けっぱなしで忘れているのだろうかと思っただが、そうではなかった。窓の向こうに人の顔がにゅっと現れ、ぎよつとしたような

目でこちらを見た。

眼鏡をかけた中年の男だった。

数秒後、若い女の顔もその隣に並んだ。髪が乱れている。狭い乗用車の中で伏せる形で何をしていたのか、想像しなくても分かる。

球湖も気づいたらしく、その車とはかなり離れた場所に四駆のレンタカーを停めた。

「お客かしら。だったら、部屋に入ってからすればいいのに、変わってるわね」

球湖が声を潜めて言う。

俺は黙っていた。

シートベルトを外し、後部座席に脱ぎ捨てたコートやバッグを整理する。宿に持ち込むものと車の中においていくものをより分けていると、いちばん奥の車から男女が出てきた。

荷物を手にしているから、まだ旅館にチェックインしていないようだ。部屋に入る前に車の中で愛し合うとは、よほど待ちきれないのだろうか。男のほうは俺よりも年上に見えるが、そもそもこういうカップルなのか？

そう詮索すると同時に、向こうにも俺と球湖は似たように怪しげな関係に見えるに違いないと気づき、思わず苦笑してしまった。横を通り過ぎるとき、若い女のほうが、照れ隠しからだろうか、「こんにちはー」と歌うように挨拶した。さつき一瞬見たときに乱れていた髪は、もうすっかり直している。素早い。

球湖が「どうもー」と、これも歌うように返事した。

俺はなんとなく黙っていた。何を言ってもこんなときは間が抜けて聞こえる気がしたからだ。

中年男のほうも、俺たちを一瞥はしたが、黙って通り過ぎた。

二人はまるで、俺たちとかち合わずにチェックインしようとする

るかのように、足早に消えていった。

駐車場から宿の建物は見えなかった。

ヘッドライトを消すとあたりは真っ暗になる。しかし、露天風呂から流れてくるらしい湯気は、闇の中にいてもうつすらと白く漂っているのが見える。

荷物を持ち、二人が消えた方向を追った。

宿の入り口より先に、いくつも並ぶ露天風呂とランプが俺たちを出迎えた。

露天風呂は一か所だけではない。いくつもある。

まったく囲いのないあけすけな露天風呂。囲いがあつて屋根だけが抜けている風呂。内風呂も入れれば、一体何か所の風呂場があるのだろうか。

「ほう……」

俺はようやく球湖を誉めてやる気になった。球湖もそれを察してか、自慢げな笑みを浮かべている。

横に長い宿の中程に、目立たない入り口があった。

「すつごーい、ほとんど貸し切りなんだつてえ」

若い女の声が聞こえてきた。さっきのカップルの女らしい。

「こんな広い宿を独占できるなんて、贅沢だなあ」

中年男のほうの声もしたが、どこか芝居がかつたような固さがあった。若い連れに翻弄されているという感じた。

入り口の引き戸を開け、中に入ると、姿勢の悪い痩せた仲居が一足先に着いた二人を部屋に案内して行くところだった。帳場には、やはり痩せて少し神経質そうな女将らしき女性がいた。

「こんばんは。佐久間ですが……」

球湖が声をかけると、女将はすぐに応対した。

佐久間というのはもちろん偽名だ。俺の戸籍名はもつとずっと平凡な名前だ。

「いらつしやいませ。お待ち申し上げておりました」

帳場の明かりは暗く、なんだかお化け屋敷の切符売り場のようだ。遠くからかすかにエンジン音が聞こえてくる。自家発電装置を使っているらしい。

「今日はお客さんが少ないんですか？」

球湖が遠慮ない口調で訊いた。

「え、ええ……予約されていた大口の団体さんが直前で取り消しになって……」

女将は口ごもりながら答えたが、すぐに営業用の笑顔を作り、「お客様が三組目です。ほとんど貸し切り状態ですんで、どうぞゆつくりしていつてくださいませ」と続けた。

女将自らの案内で、俺たちは部屋に案内された。途中、さっきの客を案内していった仲居とすれ違った。仲居は複雑な苦笑を見せながら小走りでやってきたが、俺たちを認めると、「いらつしやいませ」と小声で挨拶した。

仲居の苦笑の意味はすぐに分かった。廊下の角の部屋からは、嬌声が漏れている。さっきの二人らしい。

「まだダメー。お風呂に入ってからよ」

「貸し切りだから、一緒に入れるな。へっへ……」
そんなやりとりが聞こえてくる。

俺たちはその部屋からはかなり離れた部屋に案内された。女将が気を利かせたのかもしれない。

部屋は八畳ほどの和室で、お世辞にもきれいとは言えなかった。しかし掃除は行き届いている。

火の気がなく、冷え込んでいたが、女将がすぐに石油ストーブに火を入れた。

「お風呂は全部で七つございます。露天風呂だけで四つ。お風呂以外にはこれといって自慢できるものはございませんが、どうぞ

「ごゆっくり」

「他に客は……さつき僕らで三組目と言っていましたか」

俺は宿に入ってから初めて口を開いた。

「お客様のすぐ前にお着きになったお二人と、夕方おひとりであらうしゃつた女性のかた……今日はそれでおしまいです。こんなことは滅多にないですよ」

「団体客がキャンセルになったんですって？」

今度は球湖が訊いた。

「ええ。それがおかしいんですよ。前にも何度かお世話になった旅行代理店さんからのご予約だったんですけれど、直前になって取り消しの電話が入りまして、一方的に切れてしまっただけです。驚いてこちらからかけ直したんですが、そうしたら今度は、そんな予約は入れていないというんですよ。ひどい話でしょう？ あ、お客様にこんな話をしててもご迷惑なだけです。すみません。お食事はすぐにお持ちします」

女将は茶を入れると、すぐに部屋を辞した。

「なんだか変な話ね。その代理店って、とぼけているのかしら？」
女将の足音が遠ざかってから、球湖が言った。

「まさか。そんなことしたら信用問題だろう。恐らく誰かの悪戯か嫌がらせだな」

「この宿に恨みがある人の？」

「さあね。それより、飯の前に風呂、ささっと入ってこようかな。一緒にどうだ？」

「やーだ師匠ったら、さつきの不倫風おやじと同じこと言ってる。あの二人とかち合ったら嫌だから、私は後からにします」

「そうか」

俺はそれ以上は無理強いせず、床の間に置いてあった旅館の手ぬぐいを手に部屋を出た。

さつきは気づかなかったが、例の二人の部屋と俺たちの部屋のちようど中間ぐらいに、もう一組、いや、もう一人の客が泊まっている部屋があるらしく、ちようど仲居が布団の用意をして部屋を辞するところだった。

「では、ごゆつくり」

仲居がポットを持って帳場のほうへ戻っていく。俺に気づいて、遠くで振り向きざま軽く会釈をした。

仲居が出てきた部屋はしんとしていた。こんな山奥に一人で泊まりに来る女性客とはどんな女だろう。好奇心をくすぐられたが、まさか覗いてみるわけにもいかない。

風呂はさすがに立派だった。せつかくなので、いちばん大きな露天風呂に入った。

他の風呂のはしごは後でゆつくりやることにし、部屋に戻ると、食事が運ばれていた。

湯上がりには、球湖と差し向かいで飲むビールの味は格別だった。

「お風呂どうでした？」

「最高だね。今まで入った露天風呂の中でもトップクラスだ」

「ね？　ここまで来たかいがあったでしょう？」

「ああ」

俺は素直に謝意を表し、球湖のグラスにお代わりのビールをついでやった。

「さつきの二人には会いました？」

「いや、なんだか部屋にこもっていちやいちゃしている。それしかすることないなら、何もこんな山奥にまで来なくてもよさそうなものだがな」

「いろんな人がいるのよ、世の中には。でもあの二人、絶対に夫婦じゃないわよね。歳が二十は離れているでしょ」

「二十離れた夫婦もいるだろうけど、夫婦だったら新婚かね。それにしてもあのいちやつきかたは異常だな」

「やつかんでるんですか？」

「俺がか？ まさか」

「そうよね。師匠には私がいるしね」

球湖は色っぽい目で俺を見つめた。だが、早くも酔ったわけではない。

座卓の上には、最初からビール大瓶三本と、熱燗の大徳利が三本並んでいる。球湖が注文したのだが、これはほとんど彼女のためのものだった。

俺も呑めないほうではないが、球湖とは勝負にならない。彼女と酒でまともに張り合えるのは、一部の力士くらいのもだろう。一晩でボトル一本空けることくらいはしょっちゅうだった。だが、限界点を越えると突然夕子の悪い酒乱になる。最近では自分でも心得ているようで、滅多にそこまでは飲まない。といっても、料理の半分が片づかない内に、ビール三本と大徳利三本は空になっていた。もちろん、俺はほとんど呑んでいない。

食事はそこそこ美味だった。山の中で海老の天ぷらは興ざめだが、近くで採れたものらしい茸を使った料理と、山芋のすり身で作った団子汁はなかなか良かった。

球湖はもう追加の酒を頼んでいる。

「飯も持ってきてくれるように頼んでくれ」

ペースについていけない俺は、たまらずそう言った。

味噌汁を運んできた仲居が、短時間で空になった酒瓶を片づけながら言った。

「旦那さん、お強いんですね。どうですか？ 秋田のお酒は？」

「なかなかいけるね」

仕方なく、俺はそう答えた。東北の人間は地元のお酒を自慢した

がる。秋田や岩手の酒は確かにうまいものが多い。俺の口には越後の酒よりも合う。

「お潤にしても、甘ったるくならないんですね。おいしいわ」
球湖がすかさず論評した。

「奥様もいける口なんですか？」

奥様と言うとき、仲居の舌が少しだけもつれた。

「ええ、少しは」

球湖はしゃあしゃあと答える。何が「少しは」だと言おうとしたが、これだけ呑んでも顔色一つ変えていない球湖を見ると、急に馬鹿らしくなってやめた。

「明日の朝、お食事は何時頃お運びしましょうか？」

仲居が訊いてきた。

「九時くらいかなあ」

そう答えた俺に、仲居は一瞬困ったような目を向けた。

「九時じゃあ遅い？」

「いえ……ええ……できればもう少し早く……」

「他のお客さんはどうなのかしら。合わせないと迷惑よね」

球湖が仲居に助け舟を出すように言った。

「お二人連れのお客さんは朝早くお発ちになるそうで、六時にと
いうことでした。もう一人のお客さんは遅めがいいということ
で、八時にということになったんですが」

「じゃあ、そちらに合わせて私たちも八時でいいでしょう？ あ、
ない」

球湖が俺の顔を覗き込むようにして言った。仲居が「奥様」な
どと呼ぶものだから合わせたのだろうが、仲居だって、本当に夫
婦だとは思っていないに違いない。

「じゃあ、八時過ぎくらいということ」

俺は往生際の悪い言い方をした。

いくらでも呑み続けそうな球湖を誘い、風呂へ行つた。

まだ九時にもなっていない。

一人客の部屋にも明かりがついていた。テレビもまともに映らないようなこんな山奥で、一人で何をしているのだろう。

アベックの客の部屋の前では、仲居が困つたように立ちつくしていた。俺たちを認めると、ばつの悪そうな顔で足早に帳場のほうに消えた。大方、まだ客がいちゃついているので、布団の用意もできずにいるのだろう。

コの字型に作られた廊下の端に帳場があり、反対側には風呂場が並ぶ別棟が続いている。そこからサンダルを履いて庭を横切るような形で行くと露天風呂がある。

闇の中に、点々とランプの明かりが点っている。

「女性専用露天風呂ですって。私はここに入るわ。師匠は殿方だからダメね」

「なんだよ。せつかく他に客がいなくていうのに、随分他人行儀じゃないか」

「だって、他人ですもの」

球湖と俺の関係……これは俺自身うまく説明ができない。友達以上恋人未満などという気恥ずかしい言葉があるが、それも違う。実は、俺には入籍こそしていないが、深く心が結ばれている女がいる。夏子といい、大阪で飲み屋のママをしているのだが、球湖は彼女の姪にあたる。いわば、こうして球湖と二人だけでいても、常時見えないお目付役がついているようなものなのだ。

もつとも、俺は女にはだらしが無いほうだし、旅先ではプロの女と遊ぶことも少くない。夏子からは「球ちゃんには絶対に手を出さないこと」と言い渡されてはいるが、その約束を守り抜く自信はない。

球湖はそれを心得ていて、俺との微妙な関係を楽しんでいるよ
うなところがある。

「じゃあな。熊にでも襲われそうになったら叫ぶんだな」

俺はそう答えると、木の扉で仕切られた隣の露天風呂に向かっ
た。

脱衣場には今にも消えそうな裸電球が一つ点っていたが、風呂
のほうには明かりらしきものがない。

闇に包まれ、入り口からでは正確な奥行きさえよく分からない
石造りの池のようなところに、恐る恐る入っていく。湯は四十度
くらいだろうか、入ったときは少し熱く感じたが、すぐに身体が
慣れ、そのうち、少し温めかなと思うくらいになった。

風呂は、十人以上入っても互いに干渉せず、ゆったりできるく
らいの広さがあった。コンクリートと石でできているらしいが、
暗くて細かな造りはよく分からない。

足下を確かめながら、ゆつくりと湯の中を進み、いちばん端ま
で移動してみた。脱衣場の明かりが小さく見えるほどの距離があ
る。

これが七つある風呂場の一つにすぎないというのだから、大し
たものだ。全部入るだけでも一日終わってしまうかもしれない。
辺鄙な場所にありながら、人気のある温泉宿だというのも、なる
ほど頷ける。

闇の奥から、ばしゃばしゃと湯のはねる音が聞こえてきた。隣
は確か女性専用露天風呂だったはずだ。誰もいないのをいいこと
に、球湖が水泳でも始めたのだろうか。

音のするほうにゆつくり移動する。

ほぼ円形だと思っていたこの露天風呂は、実はひょうたん形の
巨大な風呂の片方であり、ひょうたんのくびれの部分を板扉で仕
切って男湯と女湯に分けていることが分かった。

板塀の隙間から隣を窺うと、案の定、暗い湯面に勢いよく飛沫が上がっていた。球湖の白く細い腕が、薄闇とくすんだ湯煙の合間に見え隠れしている。

なんと球湖は背泳ぎをしていた。手のほうは面倒くさくなったのか、だらんと湯面に浮かべたまま、脚だけをゆっくり上下させている。

俺は悪戯心を起こすと、塀の下側を潜り抜けて女湯のほうに侵入した。

最近は大がかりなショーはやらなくなつたが、かつては脱出劇などもこなしたことがある。息を止めたり、気配を殺したり、一見してぐぐり抜けられそうもない穴や隙間を通り抜けるのもマジシャンの技術のうちだ。

気づかれぬよう、潜水したまま球湖のすぐそばまで近づいた。球湖は泳ぐのにも飽きてしまったのか、手足は伸ばしたまま、ただ湯の中に仰向けに浮かんでいる。

俺は慎重に真下に潜り込んだ。

球湖の細い腰と、そこだけが独立した別の生き物のような尻の双丘が、かすかに白っぽく眼前に迫っている。

俺は指先で彼女の尻を軽くつついた。

ぎゃつと彼女が叫んだかどうかは分からない。球湖は身を回転させて立ち上がろうとしたが、湯の中で脚を取られ、派手にしぶきを上げて転倒した。

俺は一瞬後悔した。こんなことでかけがえのない可愛い助手に心臓発作で死なれたりしたら、残りの人生、悔やんでも悔やみきれないだろう。死なないまでも、この慌て方では足首を捻挫くらいしたかもしれない。

それでも俺はすぐには動かず、わざとゆっくり湯の中から頭を出した。どうしても芸人魂がそうした「演出」をさせてしまう。

球湖は怒った目で睨みつけていた。即座に俺だと気づき、必死で平静を装ったのかもしれないが、さすがに助手だけのことはある。

「分かってたもんねー」

そう言いながらも、球湖の身体はこわばり、湯の中で固く両手両足を縮めている。やはり相当ショックだったのだ。

「嘘つけ。脚がもつれていたぜ。心臓発作で死なせちまったらどうしようと思ったよ」

「おあいにくさま。そんな簡単には死にません。鍛え方が違いますから」

そう言いながらも、球湖は湯の中で後ずさりするようにして俺との距離をあけた。

「嬉しいねえ。さすがは俺が見込んだだけのことはある」

俺はここぞとばかり、球湖に近づこうとしたが、球湖は片手を突き出して拒んだ。

「駄目！　そこから先は結界。入ると呪いで死ぬわよ」

「またオカルトか。俺は何度も言うようだけれど、プラグマティストなの。そんなものが怖くてマジシャンやってられるかって…」

さて、ここからどうゲームを組み立てようかと思案しているところに、渡り廊下を人が歩いてくる気配がした。

球湖も気づき、慌ててさらに俺との距離をあけた。

「どうするのよ。こんなところ見られたら…」

球湖が小声で言った。

足音は一人だった。

やがてこの女性専用露天風呂の脱衣場で、足音は止まった。

俺たちは音を立てないように、いちばん暗い場所へ移動していた。

脱衣場から漏れる明かりを背に、若い女の裸が浮かび上がった。俺は無意識のうちに、今まで目の前にあった球湖の裸身と比べてしまっていた。腰のくびれや脚の線は、球湖といい勝負だった。球湖自身も自分の裸と比べながら見ているのだろうか。

女のシルエットにはしかし、奇妙なところがあつた。頭部に大きなリボンが結ばれているのだ。

おかつぱに切りそろえた髪型とも相まって、彼女の全裸は一種異様だった。衣装を剥ぎ取られた市松人形とでも言おうか……。

女は片足を湯に入れたところでこちらを見た。

俺たちは息を殺して彼女を見つめるだけだった。

暗がりの中でも、彼女が俺たちに気づいたことは分かった。

それでも女は一瞬動きを止めただけで、慌てる素振りも見せず、ゆっくり身体を湯に沈めた。

俺たちは、湯面から突き出した、大きなリボンをつけたおかつぱ頭を黙って見つめていた。

マジシャンはこんなとき、無意識のうちに時間を計っている。脱出ショーや入れ替わりマジックのとき、一秒の読み違いが命取りになることがある。

一分一五秒から二〇秒くらい後、女は横を向きながら、入ってきたときと同じようにゆっくりと湯から出て、脱衣場のほうへ消えた。

浴衣を着る気配。やがて渡り廊下の床がかすかに軋み、彼女は宿泊棟のほうへ戻っていった。

「私たちに気づいて、遠慮したのかしら」
球湖が声を潜めて言った。

「いや、違うね。とにかく、実に興味深い行動ではあつたな」
俺はもったいつけて答えた。

結局、俺たちはそれ以上湯の中で戯れることもなく、部屋に引

き上げた。客がいないのなら、翌朝、朝日を浴びながら改めて露天風呂のはしごをするのもいいと思ったのだ。

しかし、その計画は思わぬところで不可能になった。

仲居の「お食事をお持ちしました」という声で起こされた。

つつい寝過ごしたようだ。まあいい。食事の後、のんびり朝風呂といこうと、まだ重い頭で考えながら起きあがると、球湖があたふたと身繕いをしていた。

球湖は可愛い顔に似合わず寝相が悪い。

夜具は相当乱れている。これをそのまま、朝食を運んできた仲居を部屋に見せるのは、俺としても気が引けた。

結局、仲居も気を利かせて「ここに置いておきます」と、膳を襖の外に置いて引き上げていった。

ようやく寝具を片づけ、球湖が朝食の膳を部屋の中に持ち込むまでにはたつぷり五分以上はかかった。こういうときばかりはマジックショーのように、一瞬で……というわけにはいかない。

ご飯をお櫃からよそりながら、球湖が言った。

「どうします？ 師匠。よかつたらもう一泊しません？ 今日の昼間はまだ貸し切り状態ですよ」

「そうだな。まだ風呂を十分には堪能していないしな」
俺はすぐに同意した。

そうとなれば慌てることはない。俺たちはゆつくりと朝飯を楽しみ、片づけに来た仲居にもう一泊したい旨を告げた。

「じゃあ、さっそくお風呂めぐりをしてきますね」

そう言って球湖が部屋を出たときは、もう九時近かった。俺も後を追うつもりだったが、数分後、部屋を出た途端、露天風呂のほうから、何やらただならぬ気配が伝わってきた。

廊下を仲居が顔色を変えて駆けていく。

俺は走って、昨夜球湖と一緒に戯れた女性専用露天風呂に直行した。

朝の眩しい光の中、大きな露天風呂の縁で、異様なものが横たわっていた。

頭に大きな黒いリボンをつけたままの、女の裸身。

一目で手遅れだということは分かった。

そばには球湖が屈み込んでいた。

「どうしたんだ？」

「お湯の中に浮かんでいたんです。すぐに引き上げて人工呼吸してみたんですが、手遅れでした」

球湖は冷静な口調で答えた。頼もしいやつだ。

俺は横たわる女の身体を確かめたが、球湖の言う通りだった。死因は分からないが、息絶えてかなり経っている。

そこに女将が浴衣を持ってやってきた。

「今、救急車を呼びました」

「救急車は無駄ですね。警察に連絡してください」
俺は女将に言い渡した。

「は、はい」

裸の女に浴衣をかけ、帳場に戻ろうとする女将を、俺は呼び止めた。

「待って。もう一組の客は？」

「今朝早くお発ちになりました」

「ということは、今ここに残っている客は私たちだけですね？」

では、今から各部屋に一切手を着けないこと。台所の洗い物も中止。この女性だけでなく、帰ったアベツクの客の部屋、使った食器などもそのままにしておいてください」

俺の厳しい口調に、女将は緊張した面もちで頷いた。

山奥のことだけに、救急車もパトカーも、すぐにはやってこなかった。

俺は女将に昨晚から今朝にかけてのことをかいつまんで訊いてみた。

「ええ、最初にお見えになったのは、亡くなったあの若い女のお客さんです。なんでも一緒に来るはずだったお友達が急に具合が悪くなったとかで、おひとりで見えられたんです。そのときから何か嫌な予感があったんですよ。だって、大きな黒いリボンをして、伏し目がちで暗い顔だったし、失恋の旅か何かかなと思いましたが……」

「でも、今朝はまだ生きてたんですよ。七時半頃、私、朝食を運んだときに見えていますから」

そばから仲居が口を出した。

「確かですか？」

俺はすぐに問いただした。きつい口調だったからか、仲居は一瞬身をすくめるようにして答えた。

「はい。話もしました。出発前にもう一度お風呂に入りたと言っていました。それで、私、もう一組のお客様はもうお発ちになつてしまったし、最後の一組……つまりお客様たちはまだお休みみたいだから、今なら本当にどのお風呂でも貸し切り状態ですよと言ったんです」

仲居は、怯えたような目で俺を見ている。俺が殺したとでも思っているのだろうか。

「あのアベックはもう出ていたって？」

「はい。七時にはお勘定も済ませて出て行かれました。私がお見送りしました」

と、再び女将が答えた。

「自殺かしらね……やっぱり」

球湖が呟くように言った。

「いや、違う」

俺があまりに確信を持って答えたので、周囲にピンと張りつめた空気が漂った。

そこに救急車がやってきた。

救急隊員は女性の死亡を確認しただけで引き返していった。

直後にやってきた警官二人はまだ若かった。

殺人現場などには慣れていないらしく、緊張気味に本部へ連絡を入れていた。

球湖が第一発見者だったこともあり、俺たちは当然のごとく足止めをくった。急ぐ旅ではないので、それはかまわないのだが、俺にはもう事件の全貌が大方見えていただけに、若い警官の対応の悪さに少し苛立った。

刑事がやってきたのは昼近くなってからだった。

現場を一通り検証し終わると、刑事たちは旅館の全従業員と俺たちから、別の部屋で聴取を始めた。

俺と球湖は別々に部屋に呼ばれた。口裏を合わせられないようにという聴取の常套手段だ。

殺人だとすれば、同宿していた客は他にいないのだから、容疑者扱いされても、まあ仕方がない。

まずは球湖が呼ばれた。

第一発見者だけあって、球湖の聴取はたっぷり小一時間はかかった。

ようやく戻ってきた球湖とすれ違いざま、俺は誰にも気づかれぬよう、メモを手渡した。

部屋では二人の刑事が俺を待ち構えていた。四十代半ばくらい

の小男と、三十代くらいの痩せて背の高い男のコンビだった。

「手品師だそうですね」

部屋に入るなり、年上のほうの刑事が好奇心むき出しの視線を俺に浴びせた。若いほうの刑事が「幻治郎ですよ、課長。知りませんか？」と耳打ちしていたが、課長と呼ばれた刑事は俺のことを知らなかった。

「本名は佐藤治？ よくありそうな名前ですね。宿帳には佐久間玄治とありますが……」

「私用で宿泊するときはそのような名前を使っています。高橋は多い名前なんで同姓の他の客と間違えられることがあるし、まさか芸名の幻治郎で予約するわけにもいきませんしね」

一通りの身元照会の後、ようやく事件の話になった。

「部屋から睡眠薬の空き瓶が見つかりました。これを吞んで自殺……というのが一つの見方なんですけど、一応あらゆる可能性を考えなければいけないものでして……」

刑事が言った。

「自殺であるはずがないでしょう」

俺は極力淡泊な口調でそう言った。

刑事はたちまち挑戦的な表情になって訊き返した。

「なぜかね？ なぜそこまで言い切れるんですかね？ 何かご存じなんですか？」

「だってそうでしょう。女性がわざわざ裸で自殺しますか？ それにあの黒いリボン。これはマジックでは囀効果というやつです。目をそちらに向けさせて、錯覚を起こさせるわけですよ」

「錯覚？ 何をどう錯覚させるんです？ 誰を騙す必要があるんです？」

刑事は畳み込むように訊いてきた。

「こういうことですよ」

俺は立ち上がると、廊下側の障子を開けた。

廊下の向こう側には露天風呂の一つが見えている。そこでは頭に黒い大きなリボンをつけた女が入浴していた。

「なんだ？」

刑事は驚いて廊下に踏み出そうとした。

「まあまあ」

俺は刑事の肩に軽く手を置き、引き留めた。

「ちよつとした余興ですよ。話を続けましょう」

「余興って、あんた……どういいうつもりなの？」

無然とする刑事をなだめて再び座らせると、俺はこう言った。

「刑事さん、今、あの女の顔、しっかり見えましたか？」

「見えましたよ。もちろん。あんたの助手でしょう？ さっきま

でこの部屋にいた、えーと……名前は奥野球湖さんでしたっけ？

冗談もほどほどにしないと怒りますよ」

「いえ、奥野球湖ではなく、白鳥麗子です」

「何だって？ 本人が言ったんですよ。ちゃんとここにメモして

……」

と、刑事は手にしたメモ帳に目をやったまま絶句した。

驚くのも無理はない、彼のメモ帳には、下手な漫画入りで「白鳥麗子でえーす」と大書されていたのだから。

数秒間、刑事は理解できずにメモ帳を睨みつけていたが、やがてそれが挿入された紙片だということに気づき、真っ赤な顔で俺を睨みつけた。

「あんたが腕のいい手品師だということは分かりましたよ。だが、ここは遊びの場じゃないんだ。不謹慎な態度は慎んでいただきましょうか」

「例を挙げただけですよ。あなたは今、温泉の中の女性の顔をはつきり見たとおっしゃったが、それは違う。黒いリボンを見てい

ただけなんです。しかも注意はその一点に注がれ、手にしていたメモ帳に紙片を挟み込まれたのにも気づかなかった」

「悪戯はやめなさい。そんなことを言いたいために、あんたはわざわざ助手に黒いリボンをさせて風呂に入らせたのかね？」

「いいえ、彼女は風呂になど入っていませんよ」

その声に呼応するように、廊下から、和服姿の球湖が現れた。今度は刑事もすぐには反応ができなかった。

「あの露天風呂には誰もいません。あれはリボンをつけた上半身だけの人形です。あの程度の小道具は、商売柄、いつも持ち歩いていましたね」

「だからなんなんだ！ 生身の死体があつたんだ。人間が一人死んだんだよ。人形じゃない！」

刑事はとうとう大声を出した。

「まあまあ。人間の注意力、認識力というのはそういうものだと聞いたかっただけですよ。なぜ殺された女性は黒いリボンをつけていたのか？ それは『黒いリボンの女』として認識してほしかったからです」

刑事は怒りを静めるように大きく息を二、三度吸ってから、今度は静かな口調で言った。

「どういうことかね？」

俺は、この純朴な刑事さんのために、種明かしをしてやることにした。

。

部屋に、旅館の全従業員と球湖が呼ばれた。これで全員集合だ。俺は立ち上がり、種明かし……いや、事件の解明を始めた。

「まず、殺された女性は、この宿に泊まってはいなかったんです」「なんだって？」

若いほうの刑事が思わず声を上げた。

俺は彼のほうを向いて、にっこり笑った。こういうとき、どうしてもシヨーマンシップが出てしまう。

「女将さんが最初に出迎えた一人客の女性は、実は殺された女性とは別人だったんです。その頃、殺された女性は、睡眠薬か何かで体の自由を奪われた上で、恐らく狭いところに閉じこめられていたはずですよ。多分、車のトランクでしょうね。」

女将さんは、暗い顔の、肩の上で切りそろえたおかつぱ頭に黒い大きなリボンをつけた女性を客として迎え入れたとおっしゃる。彼女を部屋に通した後、次のアベックの客が来るまでに、誰か旅館の従業員以外の人を見かけましたか？」

「いえ、お茶をお出ししてからは夕食の準備にかかっていますし……」

女将がおずおずと答えた。

「他のかたもそうですね？　そして間もなく、今度はやたらと明るい調子のアベックが現れた。我々が入ってくる少し前です。その女性客はシヨートカットでしたね？」

「はい。お客さんもお会いになっっているでしょう？」

「ええ、最初に駐車場で会いましたし、帳場でも顔は見ました。」

あの二人、部屋に入るなり、声を上げていちゃつき始めたんですよ

「そうです。もう……戸を開けるのが怖いくらいで」

横から仲居が言った。

「それがまず工作その一です。嬌声は生の声だけではなく、多分テープレコーダーの声も混じっていたんじゃないかな。部屋に入るなり、シヨートカットの女は黒いリボンの女に戻ったはずですから」

「なんだって？」

再び若いほうの刑事が声を上げた。実にいいタイミングで合の手が入るので、俺はますます気分よく種明かしショーを続けられた。

「あのアベックの女性のほうが、一人二役をこなしていたんですよ。黒いリボンは、別人だと印象づけるための小道具です。ごていねいに、風呂に入っている俺たちにまで、黒いリボンのまま印象づけにやってきた。あんな過剰な芝居をしなければ、そう簡単には見破られなかったかもしれないのに。」

あの夜、旅館の人たちは、あまりに露骨にいちやくアベックに遠慮して、ほとんど部屋を訪れていません。布団も客がさっさと敷いていたそうですしね。

翌朝、アベックは早々に宿を出る。これも不自然でしょう？なぜそんなに急ぐ必要があるのか。せっかく山奥の名旅館が貸し切り状態で、水入らずの願ってもない環境なのに。

二人は駐車場に戻ると、睡眠薬で眠らせ、トランクに押し込めていた黒いリボンの女を出し、露天風呂まで運んで、浮かべて逃げたんです。

女がどの時点で殺されたのかは分かりません。死亡推定時間を合わせるために、多分、トランクの中に押し込められていたときはまだ息があつたはずです。湯に入れてから窒息させたのか、それとも殺してから湯に入れたのか。そのへんは鑑識さんに任せましょう。

部屋に睡眠薬の空き瓶が置かれていたというのも、検死解剖で、殺した女の体内から薬が検出されるのを見越してのことです。

団体客のキャンセルというのももちろん二人組の仕業です。最初からそんな予約はなかったんです。宿泊客が少ないほうが安全なので、事前に旅行代理店の名を語って大口の予約を入れ、直前にキャンセルしたんですよ。

予約を入れたという旅行代理店は存在するようですから、そのへんの事情に詳しい人間を洗えば、あの二人の身元も割れるかもしれないですね。

黒いリボンの女に出した食事と、アベック客に出した食事、食器はまだ洗っていませんね？　すぐに指紋を検出してください。同じ指紋が残されていれば、決定的な証拠になります。あとは浴衣もね。殺されたほうの女性が着ていた浴衣に体毛でもついていれば文句なしだな。

いずれにせよ、トリックとしてはかなり幼稚なものだし、必ずどこかに証拠を残していますよ」

殺された女性の身元はすぐに割れた。

銀座で代々続いているレストランの経営者の一人娘だそうだ。経営者である父親は末期癌で入院していて、余命幾ばくもない。

彼女にはそのうち遺産が入る。レストランは赤字続きだったようだが、狭くても土地の価値は大変なものだった。

アベックの男のほうは、彼女の夫だった。若い女は銀座のクラブのホステス。よくある相続遺産目当ての殺人。

決定的な証拠は、俺の予想通り、黒いリボンの女が使ったはずの浴衣に付着していた陰毛だった。その陰毛がアベック客の女性のものとは一致したのだ。

そこまで言い当てられては警察も面目丸つぶれだが、署のほうからは感謝状などというものも出なかった。

事件の解決を、俺と球湖は、およそひと月後に岡山で知った。新聞の三面記事からだ。

「師匠、黒いリボンを見たときから変だと思っていたんですか？」
岡山のホテルのロビーで、朝刊を読みふける俺に球湖が訊いて

きた。

「いや」

俺は素っ気なく答えた。

「だって……黒いリボンは入れ替えトリックのための小道具だつてすぐに見抜いたんでしょ？」

「いや、最初はちよつと頭のおかしい女だと思ったよ」

「じゃあ、いつ事件の真相に気づいたんです？」

「裸のまま横たえられた死体を見たときさ。前の夜に露天風呂で見た女の裸とは、体格は似ていたけど、腰のくびれかたとかが微妙に違うんだよな。太股に続く曲線の感じがね、こう、ムチムチつとしてるのと、片やすーつとしてるのと……。乳首の形もね、サクランボ形と片や……。」「

「もういいです！」

球湖はそう言うと、さっさとソファから立ち上がり、歩き出した。

「あれ？　なんで？　おい、待てよ。ちよつと、球湖ちゃん」

あの暗闇の中でもしつかりシルエツトを識別できる注意力こそがマジシャンには必要なだと諭そうとしたのに、まったく球湖のやつ、まだまだ修行が足りない。

(第一話・了)

*初出・週刊小説　98年3月6日号